

大事なのはね～、人と人との関係。それと健康。

by すすむ



上市場の「よりどり」

睦沢町上市場在住 神崎 進



睦沢町上市場。名前からして、この町の商いの中心地であったことが伺える。今も元気に商売を続けているお店もあれば、昔の賑わいの名残として、看板だけが残っているお店もある。その看板ひとつひとつに情緒があり、当時の暮らしを思い起こさせる。今風に様変わりした精肉店や洋品店にも、歩んで来た歴史はしっかりと受け継がれている。そばには神社もあり、祭りでは今も変わらず神輿で賑わう。郵便局に農協、少し行けば飲み屋も並ぶ。見上げるほどの風情ある屋敷が、当時の繁栄を物語つてゐる。聞けば、以前は小中学校もこの上市場にあったらしい。商いだけでなく、庶民の暮らしの中心がこの上市場にあったのだろう。

県道85号線と148号線の三叉路が上市場の交差点だ。交差点に差し掛かると「あれ？」と気づく。運良く赤信号で止まれば青信号までのしばしの時間、しげしげと覗いてしまう。はじめてこの交差点を通った人の大半は気づくだろう。「神崎」という店に、多少好奇心のある人はそれが何屋なのかと興味を持つに違いない。年季の入った看板には、文具にファンシーにレコードとある。店先にはトイレットペーパーや二郎袋といった日用品が雑然と並ぶ。店の横には「自動販売機」「オーナー」とあるが、今ではすっかり現役を引退し、物置となつていて。しかしお店は現役だ。それはわかる。赤信号の間にも、お客さんが入つて行くのだから。

看板の「神崎」。よく見るとネオン管でなぞられているじゃないか。正式には「神崎文具店」。しかし扉の向こうには、到底文具だけでは收まらない世界が広がつてゐるのだろう。わくわくの好奇心とドキドキの冒険心と多少の勇気をもつて、「神崎文具店」の扉をノックした。



神崎さんは柿をむいていた。買い物に来ていたおばあちゃんが、どこかで柿をもらつたらしく、自分で皮をむくのは一苦労だろうと、神崎さんがむいてあげている。他愛もない話をしながら柿をむき、食べやすい大きさにカットしたら、ビニール袋に入れて買った商品と一緒に持たせてあげる。そして「気をつけてね」と見送る。その光景が、「神崎文具店」神崎進さんとの出会いだった。

謎のお店は、期待通りに品揃えも不思議だ。確かに屋号通り文房具がメインではあるが、所狭しと様々なものが並んでいる。中には時代を感じる懐かしいものも無造作に積み上げられている。これはその道のコレクターには格好の発掘場所だろう。実際、喰きつけてやって来るコレクターもいるそうだ。文房具を筆頭にお菓子、おもちゃ、プラモデル、女性の洋服に化粧品まで。カラタに駒に羽子板、時計に方位磁石にサイコロ。何といつても演歌や歌謡曲のカセットテープとアイドルのビデオには目を奪われる。店内に貼られたポスターは色褪せていて、懐かしさにあふれている。これはタレントトリップだ。平成も終わりを告げようという今、昭和の時代に迷い込んだ気分になる。夢か現実か。いやいや、ここは上市場の交差点、「神崎文具店」。まぎれもない現実なのだ。

女性の洋服は家内が東京に行つて流行を探つてさ、問屋に買い付けに行つてた。テンガロンハットも売つたなあ。流行を察知してさ、「これだ!」と思ったらなんでも売つたよ。ゲーム機も最高で16台だったかな。女性の洋服は家内が東京に行つて流行を探つてさ、問屋に買い付けに行つてた。テンガロンハットも売つたなあ。流行を察知してさ、「これだ!」と思ったらなんでも売つたよ。

今でいうディスカウントショップのようないい「神崎文具店」は、多彩な品揃えから神崎文具百貨店」と自ら名乗つてた時期もあつたらしい。実際にユーモアあふれるセンスじゃないか。しかしそのセンスは何十年たつた今も健在であると、神崎さんの格好の中に見つけてしまつた。

真っ赤なシャツにエプロン。どこかしらに赤をあしらつたアイテムを身につけていい。神崎さんのトレードカラーは赤なのだ。足元に目をやればスニーカーまで赤で揃えている。よく見ると何と手書きでカスタマイズしているじゃないか!

「だって一目で自分の靴だつてわかるだろ」と言う。さらに手書きで現れたのが、2020年東京オリンピックキヤップだ。こちらは赤ではなくオレンジだが、これも堂々のオリジナルである。



聞けばシャツもあるらしい。「これかぶつて病院に行くんだよ。みんなに注目されるよ」と嬉しそうに話してくれる。

神崎さんにとって、人生2度目の東京オリンピックがやってくる。隣町一宮がサー・フィンの会場ということもあるってが、2020年が待ち遠しくて仕方がないようだ。そんな神崎さんの屈託のない笑顔は、「平和の祭典」にふさわしい、まさにオリエンピックのシンボルそのものだ。

「人の世話が好きなんだよ。ふらふらしててる奴がいたら、仕事を紹介してやつて、お見合いまで世話してやるよ。今までに5組結婚したなあ。子供が生まれたら店まで連れて来てくれるよ。子供どころか孫まで親子三代の付き合いだよ」と懐かしそうに言ふ。

「使えなくなつた万年筆は使えるようにしてあげるし、チエーンソーが切れないと歯を磨いてあげる。鍬や鎌の歯も研いであげるし、蛍光灯が切れたら駆けつけて取り替えてあげる。商売じゃないよ。できることはやってあげる。そしたら喜ぶ顔がかかる。そんな人と人との関係が何よりも大事なんだよ」

話をしていると、次々とお客様がやって来る。買い物の人もいれば、何やら先日のお礼だと深々と頭を下げている人もいる。ただお茶を飲んで世間話をして帰つて行く人もいるのだと。神崎さんはこの町に暮らす人たちの「よりどころ」なのだろう。



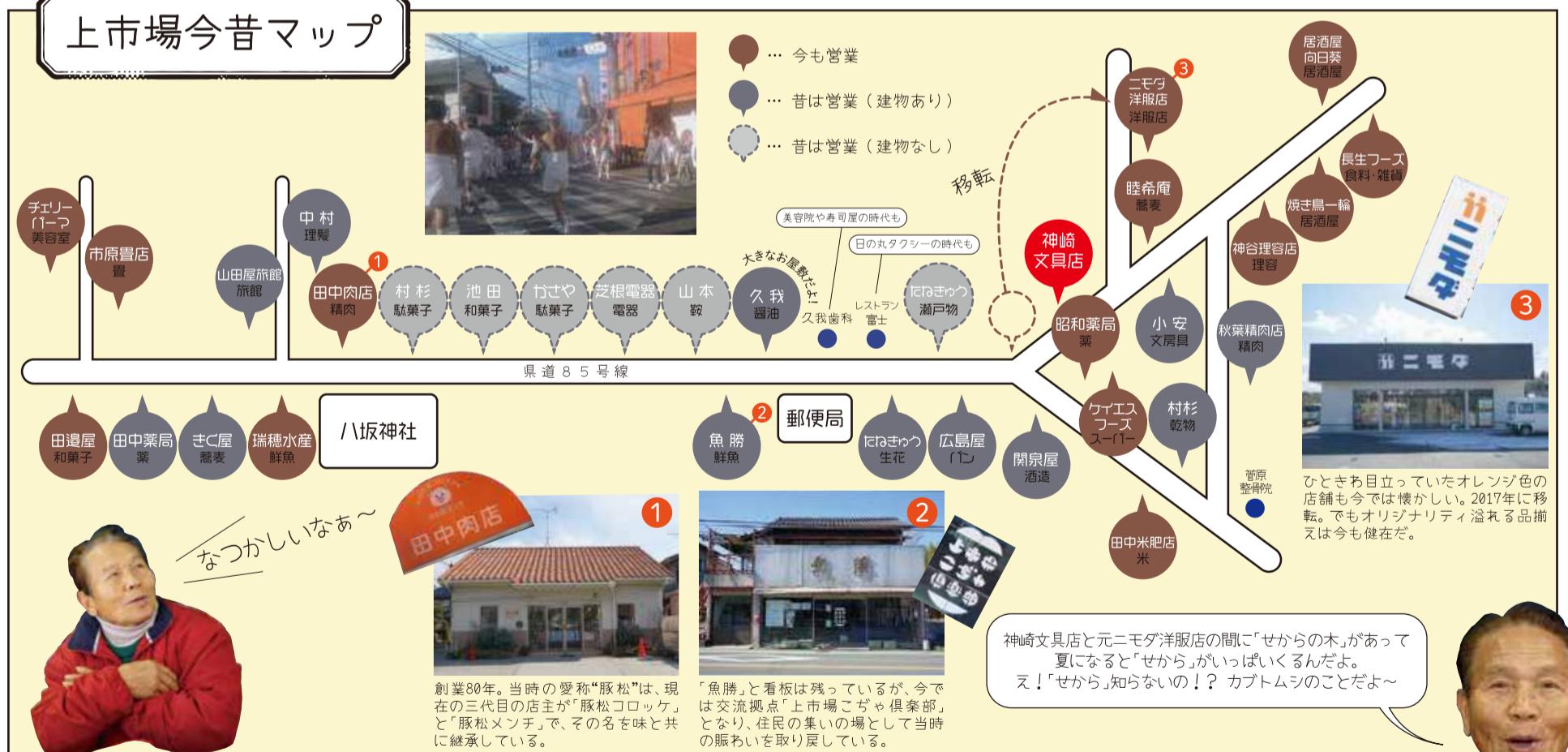


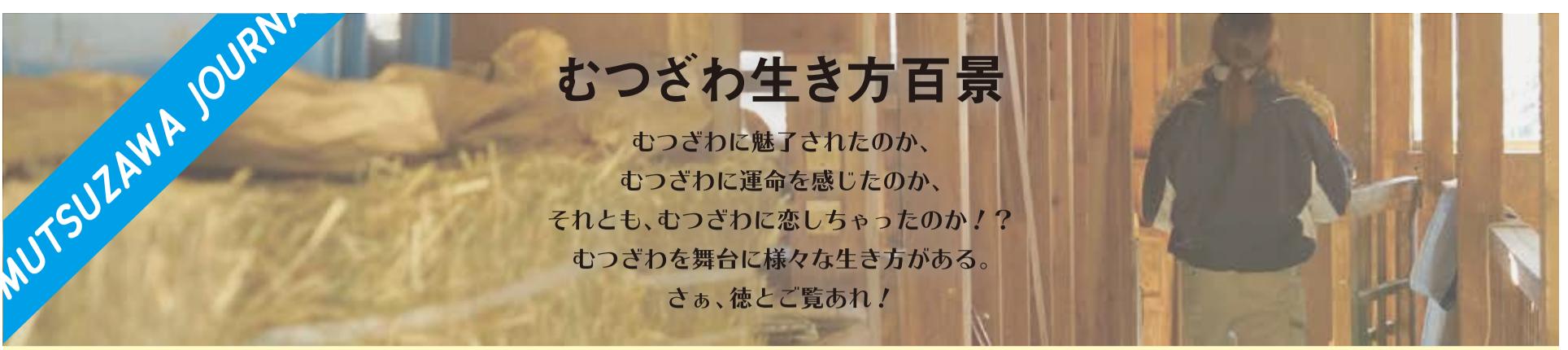
ちよつと岡本太郎に似てるな。。。

のではないだろうか。人情味溢れる神崎さんは見ていたら、そう思えてならない。

神崎さんは、アイデアとひらめきで次々と商売を変えてきた。でも変わらないことは、舞台が自分が生まれ育った上市場であること。そしてもう一つは、人の思いやりだ。声をかけ、挨拶を交わし、困つていれば手助けする。地域の歩みと共に、人々の暮らしがと共に、神崎さんの人生がある。人との関わりが気薄になつた今だからこそ、神崎さんの優しさに安心する。

上市場今昔マップ





むつざわヤギ牧場

森の飼育場・星の見える放牧場



川和さんは、都内で牛乳販売業を営んでいる。その川和さんが牛からヤギへ心変わりしたわけではなく、この睦沢でヤギと出会ったことが、川和さんのこれから的人生を大きく変えたのだ。出会いは運命の赤い糸。しかしその糸は1本ではなく、なんと100本もの束で差し出された。1年前「ヤギ牧場が売りに出ている」という情報を聞き、何の気なしに見に行つたことがすべての始まりだった。ヤギに興味があった訳ではない。どちらかというと動物は苦手な部類だ。しかしヤギに出会うや否や、そのつぶらな瞳に恋したと言いましょうか。いやいや、その瞳に運命を見出したという方が正解だろう。ヤギたちとの将来を思い描き、そして何よりこの自然溢れる環境が後押しとなって、赤い糸の束はめでたく結ばれた。晴れて川和さんはヤギ牧場のオーナーとなったのだ。その名を「むつざわヤギ牧場」。100頭ものヤギとの物語がこうしてはじまった。

当然、川和さんはヤギの飼育経験がない。知識もない。あるのはやる気だけだ。ヤギの命を預かったと言っても過言ではない。それ故、まずは様々な専門家や同業者からアドバイスをもらった。色々な出会いの中、睦沢の人たちの優しさにも触れた。農家さんからは、捨てられる野菜もヤギにとっては貴重な餌となるので、快く提供してもらっている。谷津の整備も、ときわぎ工舎のみなさんがアルバイトで頑張ってくれているからこそ実現できている。出会いは大切だ、感謝しかないと言う。

そして次なる運命の出会いは、熊ちゃんだ。名前は熊だが生粋の「ヤギ女子」だ。これまでのキャリアもヤギ一筋。そんな彼女の知識と経験は力強く、また心強くもある。そして何より熊ちゃんのヤギ愛はハンパない。ヤギにとってはこの上ない幸せだろう。しかし川和さんに言わせれば、ヤギといふ熊ちゃんが幸せなんだという。相思相愛。実に結構なことじゃないか。こうして「むつざわヤギ牧場」に新たなキャストが加わった。



雪が降った2月のある日、子ヤギが生まれた。低体温症で、このままでは死んでしまう。熊ちゃんがママがわりとなつて、自宅で世話をすることにした。その夜、自力でようやく立った。子ヤギはか細い声をあげて、熊ちゃんに歩み寄った。ママへママへって。子ヤギにとってのママは熊ちゃんた。ママは自分の名前から一文字とって「くま太郎」ってだ。ママはまだ瘦せっぽっちのくま太郎は、ずっとママの後を追っかけてる。



日々全てが勉強と発見。そして何より、ヤギの出産を目の当たりにしたことが一番の感動だと話してくれた。子ヤギがお母さんのお腹から出てくる瞬間、熊ちゃんとふたりで引っ張り出した。生命誕生の瞬間は、川和さんにとって衝撃的だったらしい。出てきた子ヤギは、おぼつかない脚で懸命に立とうとする。お母さんヤギの見守るなか、20分ほどしてようやく立つと、誰に教えられたわけでもなくお母さんヤギの元に歩み寄って、一生懸命にお乳を飲む。お母さんヤギは「よく頑張った」と我が子をひたすら舐めてやる。その光景に涙する。親子の絆に感動する。その時、この生命力と親子愛を、子供たちに見せてやりたいと思ったと言う。

そして町や教育委員会と連携して、子供たちがヤギとふれあうイベントをはじめた。出産を見た子供から「ヘソの緒って何ですか?」の質問にあたふたしたらしい。ヤギとのふれあいが情操教育の一貫となれば、子供たちにとって大切な経験だ。大人たちにとっても貴重な体験になるはず。ヤギを含めたこの自然環境が、都会に暮らす人たちの癒しになるのではないかと思いはじめたら、次々とアイデアが湧いてきた。それがヤギと人間のふれあいの場「星の見える放牧場」だ。それから地域の協力もあり、この広大な谷津の整備がはじまつた。その名にあるように、夜にはきっと満天の星空に包み込まれるのだろう。完成が待ち遠しい。

全ては1年前のヤギとの出会いからはじまつた。まさかこんな展開になるとは思ってもみなかったと言う。赤い糸で結ばれたヤギたち。そのヤギたちを通して、地域と繋がり、子供たちの未来を考えるようになった。この先ヤギたちがどんな役割を担ってくれるのか、この広大な谷津がどんな将来を見出してくれるのか。楽しみでならない。あるイベントで撮った子ヤギを抱いた女の子の写真が、何ともいい表情なんだよと話してくれる。川和さんを撮影しようとすると、同じように子ヤギを抱いて現われた。写真の女の子に負けず劣らずの笑顔からは、動物が苦手だなんて、これっぽっちも感じられない。一步一步夢が実現に向かって歩みだしている、そう川和さんの笑顔が物語っているようだ。



SARUTA VALLEY

サルタバレー

「竹ガールズ」と呼ばれるふたりが、一月の寒さが凍みる竹林から、ひと作業を終え小屋に戻ってきた。

薪ストーブで暖をとり、竹を割ったカップに注いだコーヒーを口にする。暫しの休憩が終わると、「行くぞ！」とばかりにまた小屋を出る。お揃いの赤いツナギを着る「竹ガールズ」は、島田桂子さんと石坂典子さん。ふたりは幼馴染でもある。各々愛用のノコギリを手に、3000㎡をも広がる竹林に入していく。ひたすら竹を切り倒し、運び、水の抜かれた堰(せき)の片隅で火にくべる。彼女たちは、人の手が入らず荒れ果ててしまった広大な竹林を切り拓き、再び整備して、新しい価値を生み出す『サルタバレー』という体験フィールドを作ろうとしている。全ては手作業。当然それはハードな肉体労働であり、見渡す限りの荒れ果てた竹林を目の前にしたら、気が遠くなるような作業であることは想像がつく。

今でこそ入り口ができ、小屋が建ち、竹林への道も拓けたが、ここに到るまで様々な困難が立ちはだかった。当初は、あるはずの町道すら分からぬほど荒れ果ており、竹林の中へ入ることすらままならない。陸路がだめなら水路だと、隣接した堰をボートで渡ることも考えたそうだ。この広大な竹林を相手に、果たしてこの先どうなっていくのだろうかと心配になる…。でも彼女たちは、途方に暮れることもへこたれることもない。「この地道な作業にこそ意味があり、その積み重ねが、ふたりが思い描く未来図へと向かう、もっとも大切な道のりなのだ」と、笑顔で話してくれた。

「ふとしたきっかけでこの地と出会い、この地で何ができるんだろうと考えたんです。自然豊かに見えるこの地にも、経済発展と共に開発の手が伸び、様々な姿へと変貌していった歴史があります。バブル崩壊や様々な事情で開発も頓挫し、人が離れ、いつしか荒れ果てた里山になってしまったんです。寂しい過去ですよね。でも、この地には素晴らしい魅力がある。だからこの土地にしかない、この土地本来の自然が味わえる空間を取り戻したいと思ったんです。そして、この地の魅力を心身で感じられるよう、そんな空間での様々な体験は、日々時間に追われ、情報過多で窮屈になった私たちにとっての、これから生き方のヒントになるんじゃないかと思ったんです。

『サルタバレー』という名前は、ここの地名「猿田」から付けました。この猿田の地を自分たちの手でしっかりと蘇らせることができたら、将来ここを訪れる人たちも、この地から元気をもらえるんじゃないか。そんな“場所”作りができたと思っています。」

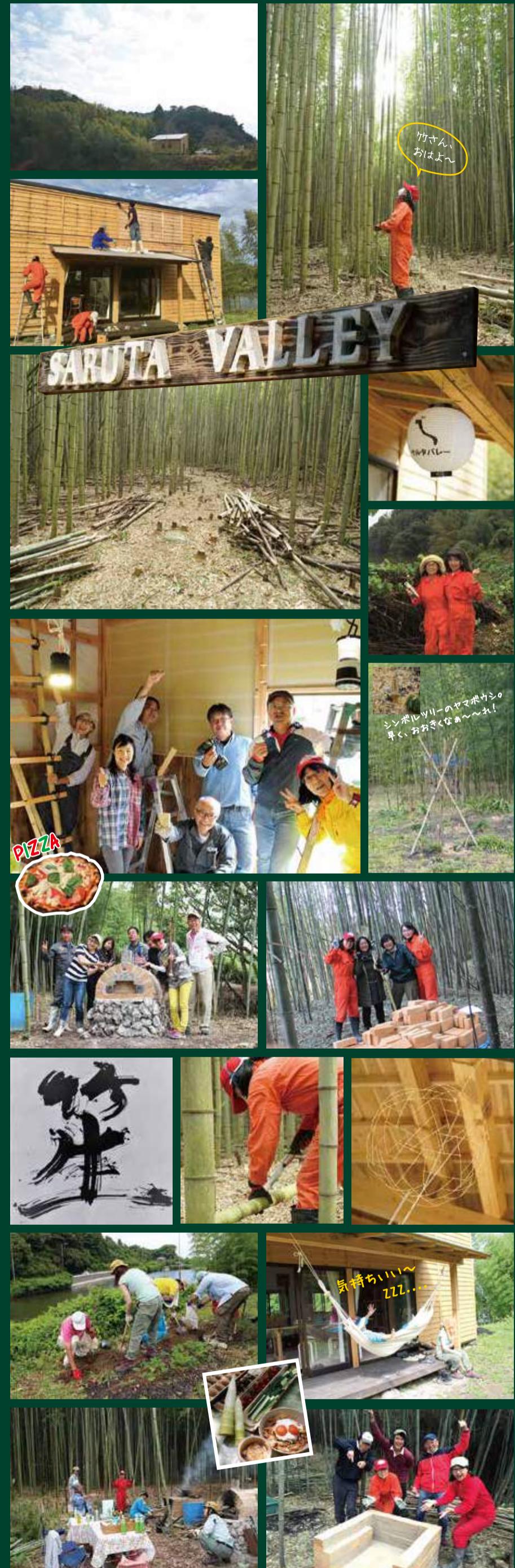
お金と機械を用いれば、この荒れ果てた竹林もあっという間に整地されるだろう。でも彼女たちはそんな合理性は望まない。この地が経験した開発の二の舞になりたくない、手をかけてじっくりと切り開く。広がれば小屋を建て、ピザ窯を作り、小さな達成を皆で喜び、味わいながら次へと向かう。その道のりの全てが、『サルタバレー』に刻まれる大切な歴史になることが、ふたりの姿を見ていて感じる。

今では「竹ガールズ」だけでなく「竹ボーイズ」も誕生して、総勢25名になった。彼女たちの思いに共感した仲間たちだ。竹が好きだったわけでも、竹を求めていたわけでもなかった。この猿田という地で竹と出会い、竹と向き合うようになったから、竹に未来を描き、竹と共に歩み出した。皆それぞれ生活も仕事もある。住んでいる場所も様々だ。日々の暮らしの合間に、未来の暮らしのために皆が集まる。スピード重視の現代において、コツコツと作り積み上げていく感覚というのは、我々にとってもっとも求めているリズムなのかもしれない。そして、じっくり味わえる達成感というのもまた、贅沢なご褒美ではないだろうか。

また道の途中。彼女たちは仲間と共に、コツコツと、じっくりと、猿田の地を進んでいく。竹林の中で光り輝く「竹ガールズ」は、ひょっとして現代の「かぐや姫」なのかもしれない。「かぐや姫」は月に帰ってしまうけれど、「竹ガールズ」はきっとこの竹林の中に、満月のような素敵なかみ『サルタバレー』を築いてくれることだろう。



<https://sarutavalley.jimdo.com>



2018年11月3日
むつざわ農林商工祭りにて

秋徳さん形見の軽トラ。その後...

創刊号で取り上げた、父から兄、兄から秋徳さんへと受け継がれた形見の軽トラ。その復活劇は、その後どうなったのか。結論からいうと、復活は断念せざるを得なかつた。この軽トラの復活には、排ガス規制など今の基準をクリアすることが必須条件。エンジンは新品で外見は昭和40年代の車体。つまり新車として登録するしか方法はないということになる。それには莫大な費用がかかり、果たして可能かどうかということも定かではない。法に阻まれ、無念の結果となつた。とはいへ、秋徳さんのエンジン魂が鎮火したわけではない。「1999年製のCB1300買っちゃつたよ～」「明日は朝からダンプの修理だよ～」と。エンジン魂は、止まるることを知らない。そう話す秋徳さんの笑顔を見て、勝手ながら安心した。今日は農林商工祭りで、秋徳さんの63回目の誕生日である。秋空の下、ご機嫌なエンジ音の大合唱がハッピーバースディを奏でてくれた。

A man with dark hair and a white shirt is looking towards the camera with a surprised expression. A large blue speech bubble is positioned to his left, containing the text "マジ!?" in white. The background is slightly blurred, showing what appears to be a workshop or laboratory setting with various equipment and tools.



すぐさま物置からレコードプレーヤーを引っ張り出し、一旦深呼吸。心静かにレコードに針を落とす... はるみちゃんの歌声が流れ出した...

The image is a black and white photograph of a traditional Japanese ink painting (suiboku-ga). Overlaid on the scene are several lines of Japanese calligraphy in red and gold ink. The text, arranged in a loose, flowing style, includes phrases such as "梅のたよりを 春風が そつと つたえる 若い町" (Using plum blossoms as a guide, the spring wind gently brings about the young town), "女ヶ堰から 瑞沢川へ" (From the Ogasawara Dam, to the Sakurazawa River), "水の流れも 夢を呼ぶ" (The flow of water also calls for dreams), "房総名物 睦沢音頭" (Famous sightseeing spot in Tsurugisaki, Mutsuzawa Odori), "踊り自慢に 唄じまん" (Dancing is a specialty, singing Jiman), and "晴れやかさ 握う笑顔の" (A sunny and cheerful expression, holding a smiling face).

リズムをつかんだところで、ジャケットの歌詞を見ながら口ずさむ。はるみちゃんとデュエットだ♪音頭は5番まで続くのである。



ジャケット裏には振り付けのHow to !!
今から夏の盆踊りが楽しみだ!!

さて謎は、何故にして、如何にして、「都はるみ」だったのかということだ。レコーディングは昭和58年。調べると「大阪しぐれ」大ヒット中の頃だ。何が「都はるみ」と深いつながりがあるのかと期待したが、結局のところわからない。しかしこうして町制施行記念を「都はるみ」も祝ってくれたという勝手な解釈で、今も大御所の歌声が町に受け継がれるということは、素晴らしいことじゃないだろうか！

A map of the Mutsuzawa area, Chiba Prefecture, Japan. The map highlights the coastline and major roads. A red wavy line traces a route along the coast from the west towards the east. A dashed black line follows a similar path further inland. A red arrow points from the text "MUTSUZAWA" at the bottom left towards the map. The text "MUTSUZAWA" is written in large, stylized red letters across the bottom of the map.